2023年産　あきさかり栽培のしおり

香川県農業協同組合中央地区営農センター（国分寺用）
香川県中讃農業改良普及センター（監修）

生育特性に合わせた栽培管理を行い、高位安定化生産に取り組み、安全で安心な売れる米を作りましょう！

病害虫の発生状況については最新の香川県病害虫防除所のホームページをご覧下さい。

○ 環境への配慮

①稲わら、麦わら等は焼かずにすき込み、堆きゅう肥等の施用により土づくりに努めましょう。
②農薬散布の際は、周辺環境に被害を及ぼすことがないよう飛散防止対策を講じましょう。

○ 品質・食味の向上

①近年、平均気温が上昇していますので、播種、田植時期は生育管理の目安に準じて行いましょう。
②地力に応じた施肥に努め、特に穂肥は草姿、葉色、品種特性に合わせた適期、適量の施肥を行いましょう。
③生育期間を通じて間断灌水を行い、適正な水管理に努めましょう。
④必須防除の徹底と病害虫の発生状況に応じて確認防除を実施しましょう。
⑤収穫前には異品種の混入を回避するため、コンバイン、乾燥機等の清掃を徹底しましょう。
⑥品質・食味を落とさないよう籾黄変率８５％程度の時に収穫し、収穫後３時間以内に乾燥作業を行いましょう。

○ JA香川米への取り組み

消費者から信頼され、売れる米づくりのため、下記の要件を満たしたJA香川米の生産に取り組みましょう。
①銘柄が確認された種子（毎年、種子更新100%）により生産・出荷されたお米
②栽培基準が守られている事が栽培履歴書により確認されたお米（収穫15日前までに各支店、ふれあいセンターへ栽培履歴書を提出して下さい。）
③JA香川県で農産物検査を受けたお米

「あきさかり」の特徴と栽培上の留意点

①短稈で耐倒伏性は強い。
②高温登熟条件で白未熟粒が発生しやすい。
③収量性は高く、極良食味。
④いもち病、紋枯病にやや弱い。
※ 適正な肥培管理、防除が必要です!!

1.生育・管理の目安

生育相	活着時期	茎が増える時期	茎の増加を抑える時期	穂ができる時期	穂が大きくなる時期	穂に実が入る時期
作業の目安 ＼ 作業基準	田植日	間断灌水開始（田植後２週間）	中干し開始（亀裂幅約１cmまで）	間断灌水開始（出穂25日前）	穂肥施用（出穂18日前）	出穂期	収穫期
管理の目安	6月5日	6月19日	7月3日	7月18日	7月23日	8月9日	9月14日～9月18日
	6月10日	6月24日	7月5日	7月19日	7月27日	8月13日	9月17日～9月19日
	6月15日	6月29日	7月10日	7月22日	7月30日	8月16日	9月19日～9月23日
水管理	深水7cm	浅水3cm	間断灌水	中干し	間断灌水	湛水 穂水（実入りを良くする）	間断灌水

栽培管理のポイント

- 基肥 土壌改良資材 肥料：○基肥は施肥基準を参照し、過剰に施用しない。
- 箱処理剤施用：必須防除
- 田植え：○株間は20～22cmとし、植付深さは、2～3cmとする。
- 初期除草剤散布：○十分に水深を確保する。散布後7日間は止水する。
- 田干し（ガス抜き）：○ワキ現象が見られたら落水し、2～3日、軽く田干しする。
- 間断灌水開始：○分けつ促進のため、浅水とし、常に水を湛めない。
- 中期除草剤散布：○使用基準を厳守する。
- 中干し：○茎数が20本程度確保できれば中干しを開始する。○地割れは1cm程度までとする。
- 極端な中干しはしない。
- 病害虫防除：○確認防除
- 間断灌水開始：○徐々に水の量を増やす。
- 紋枯病防除：○紋枯病にやや弱いため、発病を確認して防除する。
- 穂肥：○生育、葉色に合った量を施用する。○過剰生育のほ地では減肥する。
- 出穂期防除：必須防除（本田一回目）
- 畦畔雑草刈取り及び確認防除：○斑点米カメムシの発生を抑えるため出穂10日前までに畦畔雑草を刈取る
- 出穂前後水管理：○穂肥時期～出穂後14日間は最も水分が必要な時期のため、湛水管理とする。
- カメムシ防除：必須防除（本田二回目）
- 間断灌水開始：○水入れの間隔を徐々に広げる。
- 落水：○落水は収穫作業に支障のない時期まで遅らせる。
- 収穫：○籾の85～90%が黄変した時期が刈り取り適期。
- 乾燥：○過乾燥を避け、玄米水分を14.5～15%に仕上げる。
- 籾摺・調製：○くず抜きを行い、整粒歩合を70%以上に仕上げる。

2.施肥基準

1）基肥＋穂肥の施肥基準

kg/10a

肥料名	全量	基肥	穂肥（出穂18日前）	成分量 N-P-K
コシツータッチ	75	40	35	7.5-7.5-7.5

2）基肥一発の施肥基準

kg/10a

肥料名	全量	基肥	成分量 N-P-K
あきさかり一発	40	40	7.2-4-5.6
Ｊコート48号	45	45	7.2-7.2-7.2

※手振りの場合は、基肥を１割増肥する。

3）土壌改良資材

kg/10a

資材名	全量(基肥)
ユーキ鉄ケイカル	100
苦土一番	40
けい酸加里	30～40

本田施肥上の注意事項

①基肥は地力、前作物の状態によって、穂肥は生育や気象状況によって、加減して過剰施肥を避ける。
②土づくりのため、荒起こし時にユーキ鉄ケイカルまたは苦土一番を施用する。
③基肥一発タイプの肥料を使用する場合は原則、穂肥は施用しない。
④苦土一番、けい酸加里の施用時期は、基肥、追肥（出穂30～40日前）いずれの施用でも良い。
※水田では、肥料成分溶出後の被膜殻が浮上することがありますので、被膜殻を圃場外へ流出させないように注意して下さい。

3.雑草防除基準

区分	使用時期（推奨）	対象雑草名	除草剤名	使用基準（登録内容） 10a当り使用量	使用時期	使用回数	注意事項	使用月日 月	日
初期除草剤	いずれか 移植直後～７日	水田一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヒルムシロ アオミドロ 藻類 による表層剥離	カチボシＬジャンボ	30ｇ×10個（300ｇ）	移植直後～ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	1回	①散布後３～４日は水深３～５cmを保ち、１週間は落水やかけ流しをしない。 ②藻や浮草が発生している水田では、拡散効果が低下し、薬害や効果不良の恐れがあるので使用しない。		
	移植直後～９日		ジェイソウルフロアブル	500mℓ	移植時～ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	1回			
	移植時又は移植直後～９日		キクトモ１キロ粒剤	1kg	移植時又は 移植直後～ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	1回	①移植時処理は、田植機に専用散布機を装着した場合に限る。 ②藻類が繁茂した後では効果が劣るので、藻類の発生前～発生始めまでに散布する		
中期除草剤	移植後７日～ノビエ３葉期まで	ノビエ キシュウスズメノヒエ アゼガヤ	クリンチャー１キロ粒剤	1kg	移植後７日～ノビエ４葉期 ただし、収穫30日前まで	2回以内	①初期除草剤散布後、ノビエ等が発生した場合に使用する。 ②散布後３～４日は湛水状態を保ち、１週間は落水やかけ流しをしない。 ③クリンチャーバスME液剤とあわせて３回以内の使用とする。		
	移植後14日～ノビエ3.5葉期まで	マツバイ ホタルイ クログワイ ミズガヤツリ ウリカワ	セカンドショットSジャンボMX	25ｇ×20個（500ｇ）	移植後14日～ノビエ3.5葉期 ただし、収穫45日前まで	1回	①湛水状態で10ａ／20個を均一に投げ込む。 ②散布後湛水状態で７日間落水、かけ流しはしない。 ③藻や稲ワラ等残渣は拡散を妨げ、効果不足の原因となります。		
	移植後20日～ノビエ４葉期まで（落水後処理）	水田一年生雑草 マツバイ、ホタルイ ウリカワ、ミズカヤツリ オモダカ キシュウスズメノヒエ	クリンチャーバスME液剤	1000mℓ	移植後15日～ノビエ５葉期 ただし、収穫50日前まで	2回以内	①水70～100ℓに溶かして使用する。 ②落水してから散布し、その後３日間は入水しない。 ③クリンチャー１キロ粒剤とあわせて３回以内の使用とする。 ④バサグラン粒剤とあわせて２回以内の使用とする。		
	移植後20日～30日（落水後処理）	水田一年生雑草（イネ科除く） マツバイ、ホタルイ ウリカワ、ミズカヤツリ オモダカ	バサグラン粒剤	３～４kg	移植後15～55日 ただし、収穫60日前まで	1回	①落水又はごく浅く湛水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。 ②散布後少なくとも３日間（浅水処理は５日間）はそのままの状態を保ち、入水、落水、かけ流しをしない。 ③クリンチャーバスＭＥ液剤とあわせて２回以内の使用とする。		

4.病害虫防除基準

1）必須防除

種子消毒

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準（登録内容） 消毒時間	希釈倍数	使用時期	回数	注意事項	使用月日 月	日
浸種前	ばか苗病、いもち病 もみ枯細菌病 褐条病、ごま葉枯病	テクリードC フロアブル	24時間	200倍（水10ℓに50ml）	浸種前	1回	①乾燥籾と同量～２倍量の薬液に24時間浸漬する。 ②消毒後は種子を水洗いせずに浸種する。 ③消毒後の薬液は用水などに流さない。		
	心枯線虫病	スミチオン乳剤		1000倍（水10ℓに10ml）	播種前	1回			

育苗期の防除

対象病害虫名		農薬名	使用基準（登録内容） 希釈倍数	1箱当り使用量	使用時期	回数	注意事項	使用月日 月	日
苗立枯病	ピシウム菌 フザリウム菌	タチガレエースM液剤	500～1000倍（水10ℓに20～10ml）	希釈液を500ml灌注	播種時又は発芽後	1回	①播種量の多い条件では苗が伸びすぎることがある。 ②発芽後に使用する場合は1000倍希釈液を１箱当り500ml灌注する。		
	トリコデルマ菌 フザリウム菌 リゾープス菌	ダコレート水和剤	400～600倍（水10ℓに25～16.6ｇ）	希釈液を500ml灌注	播種時～緑化期	2回以内	①播種14日後までに使用する。 ②タチガレエースM液剤、同粉剤を使用した場合は、必ず使用間隔を３日以上あける。		

育苗箱防除

防除時期	使用地域		対象病害虫名	農薬名	使用基準（登録内容） 1箱当り使用量	使用時期	回数	注意事項	使用月日 月	日	月	日
田植当日	いずれか	中山間～平坦地	いもち病、紋枯病 ウンカ類 コブノメイガ イネツトムシ	ビルダーフェルテラチェスGT粒剤	５０ｇ	緑化期～移植当日	1回	①老化苗、軟弱徒長苗、茎葉がぬれているときは薬害のおそれがあるので使用しない。 ②茎葉に付着した薬剤は、払い落として移植する。 ③移植後は直ちに入水し株元の土が露出しないようにする。				
		平坦地～海沿い	いもち病、紋枯病 ウンカ類 コブノメイガ イネツトムシ	エバーゴルプラス箱粒剤	５０ｇ	播種時～移植当日						

※「水稲育苗のしおり」を参考に施用する。

本田防除

防除時期		対象病害虫名	農薬名	使用基準（登録内容） 10a当り使用量	使用時期	回数	注意事項	品種及び使用月日 月	日	月	日
防除一回目	いずれか 出穂20～15日前	いもち病、紋枯病 ウンカ類、カメムシ類 ツマグロヨコバイ	ゴウケツモンスター粒剤	3kg	収穫45日前まで	1回	①３cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後１週間は落水やかけ流しをしない。				
	いずれか 出穂3日前～直前	いもち病、紋枯病	ダブルカットバリダフロアブル※	1000倍 60～200ℓ	穂揃期まで	2回以内	①ていねいに散布し隣接ほ場に飛散しないよう注意する。				
防除二回目	いずれか 出穂後10～20日	カメムシ類 ウンカ類 ツマグロヨコバイ	スタークル粒剤	3kg	収穫７日前まで	3回以内	①粒剤は３cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後１週間は落水やかけ流しをしない。 ②水溶剤は、ていねいに散布し隣接ほ場へ飛散しないよう注意する。 ③ゴウケツモンスター粒剤を使用したほ場は、粒剤・水溶液あわせて２回以内の使用回数とする。 ④斑点米の発生を防ぐため、必須防除とする。				
			スタークル顆粒水溶剤	2000倍 60～150ℓ							
			スタークル豆つぶ	250g							

※出穂前にダブルカットバリダフロアブルとスタークル顆粒水溶剤の混用散布を行う。

2）確認防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準 10a当り使用量	使用時期	回数	注意事項	使用月日 月	日
移植後	スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）	スクミノン	１～４kg	収穫60日前まで スクミノンとジャンボたにしくんは、あわせて２回以内の使用とする	2回以内	①移植後、スクミリンゴガイを確認したら直ちに散布する。 ②水口周辺や深水になる場所は被害が多いので、所定の範囲内で多めに散布する。		
		ジャンボたにしくん	１～２kg					
穂ばらみ期～穂揃期	紋枯病 稲こうじ病	モンガリット粒剤	３～４kg	収穫45日前まで	2回以内	①３cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後１週間は落水やかけ流しをしない。		
７月中旬～８月上旬	ウンカ類 ツマグロヨコバイ イネツトムシ コブノメイガ	バダン粒剤４	３～４kg	収穫30日前まで	6回以内	①３cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後１週間は落水やかけ流しをしない。		
葉いもち初発10日前～初発時	いもち病	コラトップ豆つぶ	250g	出穂５日前まで	2回以内	①コラトップ豆つぶは、３cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後１週間は落水やかけ流しをしない。		
初発時		ブラシンフロアブル	1000倍	収穫７日前まで				

※稲こうじ病の液剤処理はブラシンフロアブル1000倍にて行う。

※農薬・除草剤は2022年10月1日現在の登録状況による　2022年10月作成